

## フレーベルの発達思想について

池田源宏  
Motohiro Ikeda

## I

ロマン的人間は絶えず自然と精神とを一体に見ようとする。現実的の満足を超え、超現実的なものを求める人間こそが新しい文化を創造する。ドイツ・ロマンティック華やかな19世紀初頭に生きたフレーベル (Fr. Fröbel, 1782-1852) こそ、ドイツの生んだ偉大な教育思想家であった。

しかし、このフレーベルの教育思想（教育学）は、ヨーロッパの教育学が功利主義や軍国主義の影響を受けていた20世紀の初めには、あまり顧みられなかったが、その後オイケンを中心としてイエナに発展した理想主義の教育学や、ナトルプ (P. Natorp) を中心としてマールブルグに生まれた新理想主義の教育学、さらにはシュプランガー (E. Spranger) やリット (T. Litt) によって高唱された文化教育学によって、母国ドイツに於るフレーベル教育学への関心は次第に高まってきた。<sup>(1)</sup>「関心が高まった」ということは、フレーベル教育学に内包されているものの現代的意義が、改めて重要性を増してきたということに他ならない。

しかし皮肉なことに、母国より一足先にフレーベルの教育思想に関心を寄せたのはアメリカの教育界、教育思想界であった。しかも彼の教育思想の実践という形で、あるいは当時のアメリカ社会に適合した教育思想の型でとり入れたのであった。もちろんフレーベルが彼の名著『人間の教育』*Menschen-erziehung* を世に出した1826年当時、ドイツにはわずかな理解者はいたが、彼の教育思想がその後アメリカほどには実践の型で受け入れられることはなかった。<sup>(2)</sup>フレーベル自身も生前に新大陸アメリカへ渡り、自らの教育思想を実践したい希望をもっていたことはよく知られたことであるが、それはかなえられなかった。

アメリカにおけるフレーベル思想の実践的展開は、ひとつにはボストンのエリザベス・ピーボディー (E. Peabody) の幼稚園運動に端を発し、ジョン・デューイ (J. Dewey, 1859-1952) によるシカゴ大学の実験学校へと実を結んでいく。すなわちアメリカにおける、いわゆる新教育運動なるものはフレーベルと切り離して考えることはできず、その運動はフレーベル教育思想と表裏一体をなすものであった。<sup>(3)</sup>とくにフレーベル思想を学問的に拡張したのがデューイとキルパトリック (W. H. Kilpatrick) だといわれている。しかし私はさらにここにホール (S. Hall) をあえてつけ加えたい。(その理由についてはVIで触れる。)

アメリカの新教育運動には、フレーベル教育学の底を流れている児童中心主義の原理や創

造的自己活動の原理や労作の原理および個性や社会の原理がいたるところで高唱されており、次第にこの運動が発展してチャイルドセンタースクール、プロジェクトメソッド、デルトンプラン、ウィネットカシステムおよびプラトゥーンプランやワークブックプランとなり、さらにキルパトリックを中心とするコミュニティー・スクール community school の運動となっている。この運動の源泉にフレーベル教育思想が一つの重要な位置をしめているともいわれている。<sup>(4)</sup>

アメリカにおける教育学の総帥であるデューイがその有名な著作『学校と社会』(School and Society)、『民主主義と教育』(Democracy and Education)、『思考の方法』(How we think)などで多角的にフレーベル思想に論及していることはよく知られたところである。とくに「学校と社会」の第五章「フレーベルの教育原理」において、シカゴの実験学校の諸原理を示し、「以上述べたことが、フレーベルの教育哲学を正しく表わしているとすれば、そのかぎり、当校はその哲学を示す典型と見なされてよいであろう。ここでは現在、これらの教育的諸原理を12歳の子どもに適用する場合でも、4歳児にあてはめるのと同様な信念と誠実さをもって、その諸原理に従って実践して行こうという企てがなされているからである。」<sup>(5)</sup>と述べている。このことから明らかなように、デューイの教育実践、教育思想の重要な部分が、フレーベルから大きな影響を受けているのであり、また彼を中心とするアメリカの教育思想が戦後我が国に与えた影響の大きさを考えるとき、あらためてその源泉としてのフレーベルにまで遡る必要があるのである。

さて、フレーベルの教育思想(教育哲学、教育の方法)のあらましを窺い知ることのできるのには主著『人間の教育』である。一般にフレーベルの名まえは、世界で最初の幼稚園の創設者、幼児教育の実践家として結びつけられるのであるが、この著書は、彼が幼稚園を構想するよりも、また「幼稚園」という名称を思いつくよりも、<sup>(6)</sup>14年前の1926年に出版された。アダムス(Adams, J.)は『人間の教育』の主張と幼稚園との間には、ほとんどあるいはまったく関連がないとさえいつている。<sup>(7)</sup>事実『人間の教育』をひもとくと、彼の教育の理論や方法は、人間教育全般に普遍的に妥当させようとしたものであることがわかる。そしてシュプランガーもいうように、この著書は「哲学的基礎づけ<sup>(8)</sup>のところを除けば、発達史的観点、これは、フレーベルと当時の思弁的児童心理学の主張者によって教育学の中に導入された観点なのだが、この発達史的観点から、この著作が構成されている。」<sup>(9)</sup>という当時の教育論としてはきわ立った特色をもっている。さらにシュプランガーが「多くの場合、表紙に付け加えられた次のような文、<第一巻少年期の開始まで>という文は見のがされがちである。」<sup>(10)</sup>といて、フレーベルのこの著作の発達史的観点からの論究がいかに重要であるかを認めている。

およそ教育において人間の発達をどうとらえるかは、子ども観(人間観)、教育観、教育方法といった教育論にとって不可欠な問題にかかわるだけに、きわめて重要である。この小論

では、フレーベル教育思想における発達観ないし発達思想が、どのような思想的背景にもとづくものであるか、またそれがどのようなものであり、さらに、今日的にどのような意味をもったものであるかについて論及してみたい。

## II

フレーベルの不朽の著『人間の教育』は「すべて天地間の万物の中には、一つの永久不滅の法則が存在し、これが万物を生かし、しかもこれを支配している。その法則は、外界すなわち自然にあっても、内界すなわち精神にあっても、また内外両界の結合としての生命にあっても、同様に常に明瞭に現われている。」<sup>(10)</sup>という書き出しで始まるが、彼の教育学ないし教育哲学は、基本的には、この文章が除々に発展されていく漸次的な展開であるとさえいわれている。<sup>(11)</sup>

教育史上フレーベルほど、教育学の基礎づけに哲学を活用した教育思想家はいないといわれているが、彼の教育学は、経験的教育学 (empirische Pädagogik) に対する科学的教育学 (wissenschaftliche Pädagogik) もしくは哲学的教育学 (philosophische Pädagogik) であるといっても過言ではないともいわれている。<sup>(12)</sup>

人間の発達に関する思想は、おおむね、現代の発達心理学では科学として扱われているのであるが、この小論でふれていくように、フレーベルの発達思想は、ある面では科学的であり、また他の面ではきわめて哲学的である。したがって彼の発達思想に論及していくためには、彼の思想的背景を辿る必要がある。

フレーベルがドイツのチューリンゲンの森に呱呱の声をあげたのは1782年4月21日のことであるが、18世紀はカント、フィヒテ、シェリングおよびヘーゲルらの偉大な哲学者の出現によって明らかなように「哲学の世紀」の名にふさわしく、ヨーロッパの全体文化が濃厚な哲学的雰囲気の中に包まれた時代であった。時代のこのような雰囲気の中で、人間教化の世界にもルソーを始めペスタロッチやフレーベルのような偉大な教育思想家が次々に出現し、哲学の世紀はやがて「教育学」の世紀となっていくのである。西洋史の示すところからも明らかなように、フレーベルの時代はドイツ理想主義哲学の最盛期であって、彼の誕生はカントが『純粹理性批判』(Kritik der reinen Vernunft) を公にした1781年であり、カントに続いてフィヒテ、シェリングおよびヘーゲルが相次いで現われた。

フレーベルはその青春時代、職を探すべく転々と流浪の旅を続けながら空想的な思索に耽けることが多かったが、彼の空想的なロマン的な思索の対象となったものは、主として彼自身の生命あるいは彼を取り巻く神秘的な自然界などであった。この思索的傾向は成人になってからも続いたので、彼は一方では絶えず人間の生命の問題に没頭しながら、他方では絶えず自然の内奥あるいは神秘を明らかにしようと努力した。<sup>(13)</sup>このようにして彼は次第に自らの世界観あるいは人生観を形成させていく。

フレーベルが彼の自伝の中で語っているように、<sup>(14)</sup>彼はあるいはイエナ大学において、あるいはゲッティンゲンの大学において、あるいはまたベルリン大学において、最初に興味関心をもったものは自然科学と数学であったが、他方直接哲学者の講義を聴くことにより、また学友との交際により、さらには書物によって、時代の哲学者や詩人らに接する多くの機会をもつことができた。とくにベルリン大学では古代哲学史の批判的講義を聴いたというが、そのほかシュライエルマッハの講義にも出席し、またフィヒテの熱心な聴講者でもあったといわれる。しかもフレーベルはたとえ自然科学の講義を聴いても常にそこから同時に哲学を学んでいる。というのは当時の自然科学は自然哲学 (Naturphilosophie) と切り離せない密接な関係に立っていたからである。当時は多くの学徒が自然を体系化しはじめた時代であるが、当時の哲学のなかに強くみなぎっていた「統一」の思想は自然科学にも強く要求された。<sup>(15)</sup>フレーベルが大学において、すすんで師事した教授の中には、有名な自然科学の体系設立者、とくに結晶学の体系設立者といわれている著名なヴァイス (Ch. S. Weiss, 1780-1856) <sup>(16)</sup>や、植物学の体系設立者として著名なバツチュ (A. C. Batsch) らがいる。

荘司博士によると、フレーベルに哲学的影響を与えた著作の主なもの第一にあげられるのは古典文学に関する書物だという。<sup>(17)</sup>フレーベルの時代の古典文学運動には多くの哲学思想が浸透しており、18世紀から19世紀への転換期においては、いずれの詩人もいずれの思想家も同じ一つの目的を追い求めていた。というのは彼等が追求していたものは一個の新しい世界観であり新しい人生観であったが、その思想の根底には常に「発展」(Entwicklung) という原理が横たわっていたという。<sup>(18)</sup>したがってそこには哲学的な考え方が働かざるを得なかった。<sup>(19)</sup>当時フレーベルの愛読した書物の一つはゲーテとシラーのものであったといわれるが、なかでもシラーの『人間の美的教育について一連続書簡』(Über die ästhetische Erziehung des Menschen, 1793-1794) は彼に深い印象を与えたという。そのほか彼の思想に大きな影響を与えたものはシェリングの『世界精神について』(Von der Weltseele, 1798) と『ブルーノ、あるいは事物の神のおよび自然的原理について』(Bruno, oder das göttliche und natürliche Prinzip der Dinge, 1802) であるが、ヘーゲル哲学の体系にも通じていたといわれる。しかしシェリングやヘーゲルの著作よりいっそうの熱意をもってフレーベルが研究したのはクラウゼの著作<sup>(20)</sup>であった。ロマンティークの哲学者にして、万有在神論(Panentheismus)の創唱者であるフリードリッヒ・クラウゼ(Fr. Krause, 1781-1832)との思想的、实际的交流が深かったことは、フレーベル『自伝』の後半が自己の思想の発展を叙述してクラウゼに宛てた書簡であることからもうかがい知ることができる。さらにロマン主義者ノヴァーリス(Novalis, 1772-1801)の著作集がフレーベルを感動させたことは彼が自伝の中で、「わたしの精神の最深部にかくれた動きと感覚と直観とを、明らかにかつ生き生きと知らせてくれました。わたしの精神や心情の最奥の憧れや志向がわたしには明白になってきました。この本を手放すことは自分自身を手放すことと同じような気持でした。」<sup>(21)</sup>といっていること

によっても明らかのように、彼の哲学的思想に影響を与えていることは確かである。

いずれにせよ生来ロマン主義者であったフレーベルが、ロマン主義のうねりの中で、当時の華やかな思想家から大きな影響を受けたことは容易に理解できる。このような時代の所産であるフレーベルの教育思想（教育哲学）はいろいろな影響を多面的に受けながらも、シュプランガーもいっているように、「全く独自の構成を持つもの」<sup>(22)</sup>であった。その彼個有の思想形成がどのようなものであったか。ここでさらにもう少しその源泉に遡ってみる必要がある。それには彼の教育思想形成を理解するためにも、また、とくにその発達思想を理解するためにも、ドイツ・ロマン主義、さらには彼の哲学、なかならず自然哲学からの影響を考察する必要がある。

### III

ロマン主義は、18世紀から19世紀にかけてヨーロッパの精神史に流れた逞しい精神のうねりである。ボルノー（O. F. Bollnow）によると「ロマン主義のもとにわれわれは、ドイツにおける偉大な精神運動の、おそらくは最も豊かに分岐された一つの位相を理解する。その運動は、文学の領域において18世紀の70年代に「疾風怒濤」（Strum und Drang）時代と共に始まり、ついで古典主義（Klassik）に流れ込み、さらにはロマン主義において発展し、そして19世紀の中頃のいわゆるビーターマイヤー時代に至って、ゆるやかにその流れを止めた。」<sup>(23)</sup>のである。これらの運動はいずれも人間中心であって、人間性の優位を説いている。いうまでもなく、それぞれは固有の性格はもっていたが、人間がこんなにも神聖視され、またその品位と価値がこんなにも高く評価された時代はおそらく他にないであろうといわれている。

しかし、こうしたより大きな運動に対して、納得のいく統一的な名称はまだ見出されていない、とボルノーはいう。彼の見解によると「たとえば、コルフは〈ゲーテ時代〉という言葉を使い、この運動を、種々の位相を通じて指導的な人物であった一人の人間の名前でもって特徴づけたが、しかしこれでは、運動の全体をやはりあまりにも一人の人間の視野からのみ見すぎてしまっている。」<sup>(24)</sup>という。他方ノールは「〈ドイツ運動〉という言葉を用いた。そして、そこにおいてドイツの精神発展の頂点がその特殊性に関して、一般西欧的な背景から際立っているこの精神的潮流の国民的な結びつきを明示しようとした。」<sup>(25)</sup>そしてこの名称は、現在ではますます承認され始めているという。さらに彼はロマン主義は、時代的にはおおまかにいって、18世紀の最後の10年間および19世紀の最初の数10年間を含むという。そして一般に〈ドイツ運動〉が、文学の分野のみならず、この時代のすべての分枝を含めて精神的生活の全体を包括しており、同時に哲学にも作用を及ぼしてドイツ観念論を生み、また同時に新人文主義の形をとってこの時代の教育制度にも明白な刻印を与えたと同様に、ロマン主義もまた、「精神生活を貫いて流れる一般的運動」として理解されなければならない。すなわち、文学、絵画、音楽におけるのと同様に、哲学や自然科学および精神科学の方面の種々

な個別科学においても作用したのであり、要するに精神生活の全体のなかの分枝が、一つたりともその運動に触れられずに残っているものはないといわれている。以上のような意味でロマン主義は、また教育にも作用し、ありきたりの教育史ではあまりにも注目されていない特殊なロマン主義の教育学の固有の領域をもたらしめている。そしてロマン主義の教育学者の代表者として、ドイツ運動の頂点として、ボルノーはエルンスト・モーリッツ・アルントとフレーベルをあげている。しかしさらに、この二つの頂点の中間に、まったく異なった源泉から流れ込んだ運動が流れ込む。それがすなわち、国民教育の思想であり、この思想は、ナポレオン支配への抗戦から発展し、そして特にフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』（1808年）において強く現われているのである。<sup>(26)</sup>

さてフレーベルは、世代からいうとロマン主義の後期に属するのであるが、彼の世界観は、「何としても前期ロマン主義の思想に根ざしている」といわれる。だからフレーベルは一般的な精神史の動きの外に立っているのであって、いわば「遅れて来た」思想家なのだという。<sup>(27)</sup>しかし彼はすでにIIでも触れたように、ロマン主義思想の前期の代表者たちを知っており、この前提によって決定的に規定されて、彼の広汎な教育学の体系を樹立する。そしてこの期のフレーベルの青年期の決定的な経験となった代表的な人々としてボルノーはノヴァーリスとシュリング、アルント、そしてフィヒテ及び彼等の著作をあげている。<sup>(28)</sup>

ところでロマン主義は、ややもするとその本質が明確に理解されないうらみがある。ただいたずらに脆弱性からくる空想的なもの、非現実的なもの、物語的なものあるいは抒情的なものなどと考えられがちであるが、それは単なる空想や現実逃避や安易な憧憬から生まれてきたものではなくて——このような傾向のものも多少はあるが——むしろ逆に現実のうちに理想を見、理想のうちに現実をみようとするある種の調和的な願望から生まれてきたものであること看過してはならない。ロマン主義の最も顕著な特質は、明白な意識状態・自覚した精神、すなわち理性の所有とともに、他方人間の中に存在する未知なもの・神秘なものを理性の活動によって破壊させまいとする強烈な要求である。<sup>(29)</sup>またロマン的人間は常に有限のうちに無限を、時間のうちに超時間的なものを、無常のうちに永遠を、地上的なものに天上的なものを、時間的なものに神的なものを憧憬し追求しようとする。われわれはフレーベルの教育思想の中にこそこの立場を見ることができるのである。

以上概観したように、フレーベルは歴史上まれにみる豊かなロマンティックの時代に生きて、きわめて多面的影響を受けながら固有の教育思想を形成したのであるが、では彼の根本思想（哲学といってもよいが）の対象がどのような種類のものであったか、換言すると、彼の哲学の問題中とくに興味関心をひいたものはどのような問題であったか。このことを明らかにすることによって彼の教育思想の特色を画くことができるであろう。この小論ではその詳細に立ち入ることはできないが、彼の発達（展）思想を辿るうえに関連すると思われる概括的な輪郭を述べるとつぎのようである。

フレーベルの興味をひいたものは、なによりもまず形而上学的な問題であった。だから認識論の研究にはあまり興味を示さなかった。<sup>(30)</sup>そして形而上学的な問題、すなわちフレーベルの形而上学は主として自然哲学であった。実際彼はひとりの優れた哲学的な自然研究家であった。彼の形而上学ではまた神学的宇宙論的問題が執拗に論議されている。このことは彼の生い立ちと深くかかわっている。形而上学の問題以外にフレーベルの興味をひいたものは人間の生命に関する問題であった。これには哲学的人間学・生命哲学・思弁の心理学等が含まれている。彼はこのような領域の研究によって、はじめて自己の教育学に科学的根拠を与えることができたのであり、そこで人間の生命の探究から人間の使命を探究することを忘れなかったのである。

さきに、フレーベルの形而上学は自然哲学であったと述べたが、シュプランガーもいっているように、固有の意味でのフレーベルの発達思想を完成させる機会を最初に成熟させたのは、ロマン主義の自然哲学であった。<sup>(31)</sup>しかも「発達思想」という観点からみる場合、その自然哲学は有機体論的自然哲学と深くかかわっているものと考えられる。ここではこの哲学について歴史的にさらに深く論ずることはできないが、人間の内部から自己の内的必然に従って自己発展するという「有機体的発達(展)の思想」、この思想こそがフレーベルの『人間の教育』ないし彼の文献の至る所に窺える重要な考え方である。ボルノーによると、この思想は「ドイツ運動」の古くからの遺産なのであり、それ自体としてはすでにヘルダー (G. Herder 1749-1803) にまで遡るものであるという。「思うにヘルダーは、この思想を種々な時代を通しての人類の発展と、種々な年代を通しての個々人の発展として適用した最初の人である。」<sup>(32)</sup>という。このボルノーの考え方は同時代のゲーテへ、さらにはシラー、ノヴァーリス、シェリングへと連なっていくように思われる。ボルノーは「フレーベルの発展に及ぼした重大な意義ゆえに」<sup>(33)</sup>『フレーベルの教育学』でノヴァーリスの「自然」「人間の根源的な魂」「予感」(Ahnung)「無意識の精神生活」といった問題を包括するロマン主義心理学のフレーベルへの影響という観点から章を新たにしていること、またシュプランガーの「フレーベルは、近代の進化論者とは異なり、同時並存している世界の諸々の層を、いわば、永遠の時間における歴史の痕跡と解釈しており、このことにおいても彼はゲーテと一致していた。」という見解、さらにフレーベルが(IIでもふれたように)詩人シラーから大きな影響を受けているという事実。そしてさらにボルノーが「特にフレーベルの思考過程の理解にとって必要」であるからとして「ロマン主義哲学の例としてのシェリング」という章を起こして、主体としての自然、すなわち、最も内なる本質において人間の精神に類似した精神的原理としての自然をテーマとした自然哲学者シェリングの「同一哲学」が、フレーベルのこどもの世界像の構成にとって教育学的に多くの稔りをもたらした、<sup>(34)</sup>という観点から論じていること。これらのことから、ヘルダーに源を発した有機体的発達の思想は、フレーベルの教育思想、なにかんずくその発達思想への作用が、以上のような図式でとらえられるであろう。

## IV

フレーベルの根本的な教育見解は、『人間の教育』に網羅されているといってもよいが、その根底には万有在神論 (Panentheisms) <sup>(35)</sup> という哲学的見解が横たわっている。宇宙の万有 (自然および人類) は、ある精神統一原理、すなわち神霊の表現であって、すべて神性を宿すとみる。したがって、万有の目的は、その自己に内在する神性を発展させることにあり、人間の使命もまた、神性を意識的に実現することにはかならないと考える。このような哲学的見解を、フレーベルは教育に適用したのである。したがって教育は、子ども (人間) にひそむ神聖を開発して、万物の精神的統一 (この統一者が神である) の意識的かつ純粹に自由な代表者 (実現者) たらしめることが、その目的である。そして、子どもに内在する神性を実現させるには、まず子どもの内部からの自由な発展を妨げるものを遠ざけ、内的発展を助長することが肝要であると主張した。

フレーベルはつぎのように強調する。「それゆえに、教育、教授また教訓は、必ず受動的、追隨的であることをその本来の根本的特徴とすべく、(ただし注意と保護を加える必要はあるが)、決して命令的、規定的、干渉的であってはならない。」<sup>(36)</sup> この「追隨的教育」といわれているフレーベル教育思想の側面は、元来ルソーの思想である「消極的教育」に通ずるものであるが、この考えの根本にあるのが、内部から自己の内的必然性に従って自己発展する「有機体的発達」の思想である。この意味でフレーベルは、成長する人間は自ら、たとえまだ無意識的ではあれ、何が彼から生成すべきかを最もよく知っているのだと考えるのである。したがって「神性がなんの妨げもなく働くときには、その働きは必ず善であり、また善でなければならない。」<sup>(37)</sup> のであり、このルソー的な思想で彼はつぎのようにいう。「私達は植物や動物、ことに若い動植物の生長に対しては、よく場所と時間を与えて、その自然の發育をさせるが、それは、このようにする時には動植物が、その個々のもののなかに働いている法則にしたがって立派に發育し、よく生長するものと心得ているからである。若い動植物に休息を与えて、それに強い人為的干渉を避けようとするのも、もし、そうでなかったなら、動植物の自然的な發育や健全な生長が妨げられるということが解っているからである。」<sup>(38)</sup> ところが人間の子どもに対しては、従来の教育は人々の態度がまったく別であるといって、つぎのようにいう。「児童は蠟か粘土の塊でもあるかのように、思うままに自由に取扱いられるものとされている。」<sup>(39)</sup>

フレーベルによって「受動的・追隨的」および「命令的・規定的・干渉的」と名づけられているこの二つの形式は、ボルノーによると「一方における<指導> (Machen) と、他方における<放任> (Wachsen-lassen) の区別であり、外部から、つまり教師の側から子供に規定した目的へと指導する独裁と、子供の内部にすでに現存して、いかなる専制的な指導によっても変えられないで、せいぜい妨害され混乱させられるだけの法則に従って放任すること



との間の区別」<sup>(40)</sup>であるという。

ところで、フレーベルによると子どもの心は事実蠟と同じである。つまりわれわれは子どもの心をわれわれの勝手気ままに形作ることができるし、それに対して子どもの心は自らはなんの抵抗もなし得ない。しかし、こうして外から形作られた「果実」は人工品であり、内的実体を持たない。しかるに人間の真の本質は果実と同様に、つまり有機的事象一般と同様「熟する」ということがあり得るのみである。そしてこのことはまた、われわれがそれに時間と休息とを与え、それを勝手に変化させたり急がせたりしない場合のみ、成功するのである。「神性の働きに関しても、また人間の円満な根本的に健全な発達という点からみても、能動的、命令的、規定的、また干渉的な教育法はすべて、必ず破壊的であり、圧制的であり、妨害的である。」<sup>(41)</sup>と彼は結論する。ただし、彼は命令的教育法の全ては否定しない。つまり限定的に、人間の発達ののちの段階においてはじめて、悟性の機能の出現においてはじめて、それまで単独に支配していた追隨的教育方法に、いまや要求的、命令的教育方法がその独自の課題を伴って現われる。フレーベルはつぎのようにいう。

「なるほど自然はその純真な本来の状態を十分に発揮することが非常にまれであり、人間にいたってはことにそうであろう。がしかし、それゆえにこそかえってますますそのような状態を、ことに個々の人間の場合において前提する必要があるのである。(その反対が確証されることのない限りで。)なぜならば、もしそうしなかった場合には、幸いに本源的状态が傷つけられずに残っているものでも、とかく破壊されてしまう怖れがあるからである。しかしながら、教育をうける人の全体からして、その本然の性質が破壊されているということが明らかに見られる時には、すなわち、その人の内面を見ても、またその外部的状態のすべてを見ても明らかに、そのような破壊のあることが証明されるときには、もはや受動的教育ではなく、厳格な限定的、命令的教育法が施されなければならないのである。」<sup>(42)</sup>

以上みてきたように、フレーベルは、彼のロマン主義的、神秘主義的な生活感情の最も深い根底から、根源的善を肯定し、根源的悪を否定するが、人間の発達と悪との関連をつぎのように解釈する。本来悪が人間の本質に含まれていないとすれば、それは発達の過程においてはじめて、人間に入りこんできたのでなければならない。人間の根源的本質が善であれば、そのなかで発達するすべての個々の傾向もまた必然的に善であるはずである。それにもかかわらず発達の過程においてなんらかの悪が生ずるとすれば、それは発達がなんらかの妨害的な作用のせいで、その根源的に善なる目標から逸脱させられたためである。われわれがなんらかの悪を人間のなかに見い出すとすれば、それは常に誤った発達の結果にすぎない。かくしてフレーベルは、子どもの発達の欠陥の原因に、つぎのような二つの根拠を見い出している。

すなわち、「まず第一には、純然たる人間本能のいろいろの方面の発達をまったくおろそかにしたこと。第二には、人間生活のすでに初めの頃に、不正の傾向の起ったこと、すなわち、

人間の本質の発達過程は根本的に合法的、必然的であるべきものを、早くからそれに対して勝手な不規則な干渉をして、もともとは善良であるべき素質や努力や、また立派な力を誤った方向へ曲げて、不自然に発達させてしまったことである。」<sup>(43)</sup>

以上みてきたフレーベルの発達に関する考え方の根底には、現代の精神分析学的、発達心理学的な「発達課題」的なとらえ方を読みとることができ、その意味ではきわめて新鮮でさえある。

## V

さて、フレーベルにとって、人間のうちなるもの、すなわち各人において発展していく本質（人性）とはどういうものであるか。彼はつぎのようにいう。

「人間は、いな人間のうちなる人性は、外部的に現われたものとして見れば、決してすでに完全に現われた、完結したもの、すでに固定し確立したものと思われべきではなく、むしろ、絶えず生成進行し、発達し、永遠に活動し、そして永劫無限の目標へ向って、発達と進歩の一段一段を進んでゆくものと観られなければならない。」<sup>(44)</sup>

フレーベルの確信によれば、どんな人間にも、その個々の現存在を越えて同時に人間性全体の本質が、さらにはそれを越えて神性それ自体が表現されている。この「うちなるものの自己実現」、これがフレーベルのいう「人間の課題」である。この人間個々の本質が時間のなかで永遠の法則にのっとり、永遠の「完成された」形へと発展、発達していくという考え方は、シュプラランガーによると「エンテレヒー思想」<sup>(45)</sup>であるという。<sup>(46)</sup>この考え方はアリストテレスからゲーテへ、さらにフレーベルへと受けつがれる。フレーベルはさらに続けてつぎのようにいっている。

「これに反して、人間性を静止した、完結したものと考え、その発展や形成は今はまだ、過去になったものを、いわば反復し、またより広い範囲に繰り返すにすぎない、というように見る考え方は、甚だ有害な見解である。つまりこの考え方によれば、児童やまた同様にその子々孫々は、全く、前代のものを模倣した、外面的な死せる複写、いわば前代を鑄造したものに過ぎなくなり、到底、すべての未来に対し、人類発展史上の一段階としての後世人類の発達のために、生きた模範となることはできない。実際、後世の人々は、個人としても、また人類全体としても、過去の人類の発達形成の全歴史を自らに繰返すべきであり、また実際においてこれをくり返しているのである。もし、そうでなかったら、人々は過去の世界をも、現代をも理解することはできないはずである。」<sup>(47)</sup>（傍点は筆者）

この「個体の歴史は、人類の歴史を繰り返す」（傍点部分）という考え方こそが、フレーベルの発達理論の根底にひそむ、重要な考えであり、彼の発達思想理解の鍵となる部分である。この問題については、VIでさらに検討することにするので、さらに彼のいわんとするところを忠実に考察してみる。

フレーベルによると、個人が人類の歴史を繰り返すというのも、たんに模倣や模写の死んだ方法をもってするのではなく、「自己活動と自由の働きとをもってする発達、形成の生きた方法」<sup>(48)</sup>においてでなくてはならない。人類の一員として、また神の子としての各個人のうちには、全人類（人性の全体）が含まれているわけであるから、「各人は、かような形成発達を、自己自身および他人に対して再び模範として、自由にわが身に実現すべきである。」<sup>(49)</sup>ただこの際、各人によって、それはまったく独自の、固有な、個人的な、それ自身における唯一のしかたで各人のなかに表現され、刻印づけられているとフレーベルは考える。

人間はそのまったき個性において発展しなければならない。なぜならば、全人類（人性の全体）は、その可能性のすべてを、個々の成員において体现し得るのではなくて、その内的多様性を無限に、多種多様な個性のなかに分散することによってのみ体现しうるからである。このような意味で、以上引用し、考察したフレーベルの人間の発展、人間の発達に関する根本思想は、つぎのような文で結ばれる。

全人類（人性の全体）は「こうしてこそ、人類の本質、神の本質の無限性、永遠性は認められ、またそれはあらゆる多様を内に包括するものとして予想<sup>(50)</sup>され、それがますます明瞭に、ますます生き生きと確実に予想されうるのである。」<sup>(51)</sup>と。

このフレーベルの独自の個性への方向づけは、まさに全体（人類の）に対する課題を果たすことの意であり、決して現代的意味での個人主義的、つまり社会との隔絶の意味ではない。<sup>(52)</sup>家族の一員としての子どもと同様に、人類のなかでの成員としての人間にも、つぎのように繰り返えされる。すなわち、「神および人類の全本質、これを神の子または人類の一員としての各人が最も純粋完全に表現するのは、各個人または各児童が、その独特固有の性質を十分に発展させ実現することによってである。」<sup>(53)</sup>だから、人間の自己表現、つまり最も深いところにおいて個性的な人間の最内奥の本質の表現が、人間の究極にして決定的な課題となるのである。

以上観てきたフレーベルの発達思想の根本原理は、人間の生の発達に適用すれば、さらに以下に述べるようになる。具体的に、彼は人間の発達をどのようにみたか、彼の言わんとする言葉に忠実に、さらにもう少し辿ってみることにする。

「人間の発達はある一点から始まって、間断なく着々と進行するものであり、また間断なく進歩するものとして常に注意さるべきものである。」<sup>(54)</sup>といて、「もし人間の発達過程の間断なき進行の途上に、深き区画の溝をつけたり、分離的な対立を設けたりして、そのために根本の継続、生きた結合、すなわち、いわば生命の心髄を全く忘れ去るようなことは、真に有害にして、妨害的な結果をきたすのみならず、さらに人間を破壊するものである。」<sup>(54)</sup>という。さらに彼の言わんとすることを要約してつけ加えるならば、嬰兒・乳児・幼児・幼年・少年・青年・壮年・老年などの人間の発達段階は、連続的に内から進んでくるものであり、決して個々別々なものとして考えてはならない。少年は幼年の続きであり、青年は少年の続

き、大人は青年の続きである。ところが世の実際においては、とかくそのようにみないで、幼年と少年・青年・大人とは関係のないように考え、取り扱っている。だから少年のなかに幼年を認めたり、青年は自己のうちに少年と幼年を認めたりしない。とくに最も有害だというべきことは、大人が自分のうちに乳児・幼児・少年・青年を認めないことである。つまり現在の姿は実は前の段階がつくってきたものであることを認めない。フレーベルはつぎのように言う。「けれども少年時代の年齢に達したからといって少年なのではない。青年時代の年齢に達したからといって青年になったのではない。児童時代またはさらに進んで少年時代をおえ、そして精神や気分や身体の種類な要求を十分に満したから、少年であり、また青年となったのである。それと同様に、壮年となるのも、壮年の年齢に達したからではなくして児童期、少年期および青年期の種類な要求を十分に満してしまったからこそ、壮年となったというべきである。」(55)

以上のようなフレーベルの発達連続性に関する見解は、連続発展観ともいわれている。人間発達の各時期における、それぞれの発達課題 (developmental tasks) を、それぞれの時期に踏んでいくことが、人間の正常な発達にとって必要だとされる、現代の精神分析学的な、あるいは心理学的な現代の見解を、一世紀半以上も前に強調している、このフレーベルの見解には驚ろきをさえ感ずる。フレーベルは、この発達に関する根本的見解を、つぎのような言葉で結んでいる。

「幼児でも少年でも、大人でも、一般に、各自の段階においてはその段階に相応し、それ相当の要求に適ったことのほかは何事もなすべきではない。そのように注意して進めば、次から次へと続いてくる階段は、健全な蕾から新しい芽が吹き出るようにして発達を進めてゆくであろう。そしてそのような発芽は、引き続き階段のいずれの場合にもつねにその要求に適ったものになり、かくて同等の努力を続けつついに完全なものへと達するであろう。それはつまり、人がおのおのの前段階でその場合十分な発達を遂げているから、その結果、それぞれ後の段階でも十分な完全な発達が生まれるのである。」(56)

## VI

フレーベルの発達思想の根底に、「個体(人間)の発達形成の過程(歴史)は、過去の人類の発達形成の全歴史を自らに繰り返すべきであり、また実際において、これを繰り返している。」という思想のあることは、Vで述べたとおりである。これが有機体的発展の思想にまで遡ることもみてきたが、「個体の歴史は、人類の歴史を繰り返す」というこの思想は、一種の進化思想である。IIIでもすでにふれたが、シュブランガーが、フレーベルをゲーテと同列の進化論者という扱いもしているのは、このようなところからきている。

さて、この思想は、フレーベル以降、一般に反復説、反覆説、繰り返し説、約説原理、先祖返りの原理、再演説、約履説(原語は recapitulation theory, Rekapitulationstheorie)な

どというように多様に邦訳されてきたが（以下では、この思想を最もよくいい表わしていると思われる「約履説」という訳語を用いることにする。）、19世紀の終りから20世紀の初めにかけて、心理学に生物学からの影響のつよい時代に、学界をにぎわした考え方である。このことについては、フレーベルとの関連でのちほど述べるが、それに先きだって、進化思想の歴史について多少ふれておきたい。というのは、近代の発達の科学の歴史が、進化思想と大きななかわりをもっているからである。このことを考える場合に、大きな起点として取り上げられなければならないのがダーウィンの進化論である。

イギリスの博物学者チャールズ・ダーウィン (Charles Dawin, 1809-1882) が『種の起源』(1858年) を世に出し、生物進化論を唱えたことは、人間の考え方に新紀元を画した。このことは周知のことであるが、その進化論が、いかに革命的なものであったかを理解することは、不可能なほどであるといわれている。その進化論的な考え方は、あらゆる分野に浸透してゆき、人類のあらゆる対象は、この観点に立脚して再組織の方向をたどっていったのである。

ではこのダーウィン以前の進化思想はどこまで辿ればよいか。断片的には古代ギリシャの自然哲学にまで遡ることができるが、「ライプニッツに進化の思想があったかどうかはよく問題にされることだが、生物界の連続性を時間的過程として読みかえれば進化ということになるわけであり、かりに部分的あるいは断片的であるとしても進化の考えに到達しなかったとはいえない。」<sup>(57)</sup>といわれている。そしてそのダーウィンは、「ライプニッツが連続の原理をのべたく自然は跳躍しない (natura non facit saltum)>という句を愛好した。ダーウィンがライプニッツの哲学をどこまで理解していたかには問題もあろうが、少なくとも形としては連続の原理はダーウィンにまで達している。」<sup>(58)</sup>という。そして進化論の歴史にもどっていえば、18世紀後半から19世紀前半にかけて（これはフレーベルの時代と一致するのだが）、いわゆるドイツ自然哲学が生物学に及ぼした影響はかなり大きかった、<sup>(59)</sup>といわれている。ここでまた有機体的発達思想と結びつくのである。

ところで、ダーウィンの進化論の影響を、心理学の分野で、かつまた教育学の分野で大きくうけたのは、スタンリー・ホール (G. H. Hall, 1844-1925) であった。彼は進化論の影響のもとに、進化論的生物学者ヘッケル (E. H. Haeckel, 1834-1919) の「個体発生は系統発生を繰り返す」という仮説（この生物学上の仮説はその後否定されるのであるが）や、スペンサー (H. Spencer, 1820-1903) の進化思想のもとに、進化論的な発生心理学 (genetic psychology) をうちたてたのであるが、19世紀末から20世紀にかけての、人間の発達を軸とする、子ども研究・青年研究運動の導火線となったのである。その意味で、ダーウィン以降、科学的人間研究、教育研究という名のもとに、進化論的約履説を人間教育に適用した最大の人であった。そしてダーウィン以前の進化思想をもって教育学をうちたてた最大教育思想家はフレーベルであったといえる。フレーベルが『人間の教育』を著わしてから約30年後にダー

ウィンは『種の起源』を世に出した。この進化論を根拠に、ホールは彼独自の精神進化論をもってフレーベルの教育思想、発達思想に科学的根拠を与えようとしたと考えてもよい。ホールのつぎの言葉がこのことを証明してくれる。

「……また私は、私がフレーベルの真実なる門弟であることを主張するものである。すなわち私の信奉する説 (orthodoxy) は、フレーベルが今日ニューヨーク、シカゴ、ウースター、ボストンなどに来てみる事ができるとしたら、彼も賛成してくれるであろうような説 (doxy) である。彼こそは、この上なく真実で、直覚力に富んだ心の持主の一人であった。」<sup>(60)</sup>

ところがホールの約履説は、他の教育学的業績の偉大さにもかかわらず、「発生的並行」 (genetische Paräellen) というヘッケルの生物学上の仮説がくずれたために、結果的にホールの意図は達せられなかった。エビー (Frederick Eby) のいうように「その理論 (ダーウィンの進化論) の直面せる最も困難な問題の一つは、人間の精神と靈魂に説明をつけることであった。……ホール博士のあらゆる考え方に動機を与えたものこそ、人間の精神生活を進化論的な仮説でとりもたせようとする事に対する挑戦であった。」<sup>(61)</sup>のであるが。

そして進化論以前の、神秘につつまれた、フレーベルの約履説的な進化・発達思想の部分だけが、依然として今日的課題として残されているのであるが、この神秘的な部分を新たに科学として取り上げようとしているのがピアジェ (Piaget, J.) である。

ピアジェは、子どもの思考のすじみち (発達過程) を、知覚体制という。一方向的なものから、概念という双方向的なものへの転化という方式で一般化した。思考は、それが知覚から解放され、いっそうの客観化をえようとすれば、いつでも一方向性から双方向性へという道すじをとらざるをえない。子どもも、この道をとるから、それは系統発生をくり返すことになる、とピアジェは主張するのである。

波多野完治博士は「ここでもまた、子どもの発達が、再創造、再発生としてとらえられている。こういう弁証法的立場が系統発生と個体発生の関連を新しく説明し始めたことは注目すべきである。」<sup>(62)</sup>という。

ピアジェは『発生的認識学について』という小論でつぎのように論じている。彼の論ずるところを以下に引用して、ひとまずこのこの論考を終えることにする。

「発生的認識学は、その根本的仮定として、知識の論理的、合理的体制とその知識を作りあげてゆく心理的過程との間に、ある種の並行関係があると考ええる。こういう仮定に立つて研究する場合、もっとも生産的で、もっとも明白な研究領域は、人間の歴史を、すなわち、有史以前の思考の歴史を、この仮定に立つて再構成してみることであろう。しかし、残念なことに、われわれはまだ、未開人の心理について十分な知識をもっていないが、われわれの周囲にいる子どもたちを研究することによって、論理的知識や数学的知識や物理的知識の発達について研究を進める最良の機会をもっている。」<sup>(63)</sup>

## 註

- (1) 荘司雅子著『フレーベル』、牧書店、昭和32年、166-167参照。
- (2) 彼が1840年に、世界で最初の幼稚園を設立したが、当初教育思想家としての彼は、幼稚園の創始者という形で支持された。しかし、プロイセン政府は、1851年に幼稚園禁止令を出した。(フレーベルの甥であるカール・フレーベルが幼稚園に関する書物を公けにし、そのなかで社会主義的・無神論的思想を述べたことが、直接の原因であるといわれているが。)フレーベルは、この不当な禁止令の廃棄をみずして悲しくもこの世を去った。
- (3) 荘司雅子著、前掲書、168頁参照。
- (4) 同上書、168頁参照。
- (5) J. Dewey 著、毛利陽太郎訳『学校と社会』、明治図書、1985年、159頁。
- (6) フレーベルは1837年、スイスにおけるブルグドルフの孤児院をやめて郷里に帰り、1840年、ブランケンブルグに「自己を教授し、自己を教育するように導く「直観教授の教育所」を創設し、それに Kindergarten—子どもの庭—と命名した。58歳の時のことである。
- (7) Robert R. Rusk 著、田口仁久訳、『幼児教育史』、昭和49年、43頁参照。
- (8) ランゲ版邦訳本(小原国芳、荘司雅子監修、フレーベル全集、第二巻、玉川大学出版部、昭和59年)では第一章の「総論」の部分。
- (9) シュブランガー著、小笠原道雄・鳥光美緒子訳、『フレーベルの思想界より』、玉川大学出版部、1983年、89頁。
- (10) ランゲ版邦訳、小原国芳・荘司雅子監修、『フレーベル全集 第二巻』「人の教育」、玉川大学出版部、昭和59年、11頁。(以下『全集』と巻の数だけを示すことにする。)
- (11) O. F.ボルノウ著、岡本英明訳、『フレーベルの教育学』、理想社、1982年、48～49頁参照。
- (12) 荘司雅子著、『フレーベル研究』、玉川大学出版部、1984年、13頁参照。
- (13) 同上書、16頁参照。
- (14) 前掲『フレーベル全集第一巻』、「教育の弁明」、第二章参照。
- (15) 荘司雅子著、『フレーベル研究』、前掲書、17頁参照。
- (16) ヴァイスの結晶学は、フレーベル教育学の特徴的な側面である、「人間を教育するには、まず自然の発展段階に現れている発展の法則を明らかにしなければならない。」と信じさせた、きっかけとなっている。
- (17) 荘司雅子著前掲書、17～18頁参照。
- (18) この「発展」の問題が、この小論の主題と関係するので、III以下で論及する。
- (19) ダーウィンの『種の起源』が世に問われたのが1858年である。シュブランガーによるとフレーベルもゲーテも進化論者として扱われているが、ダーウィン以前の進化論者は、自然哲学的であったとみなしてよいだろう。

- (20) 彼の著作の主なものは『Historische Logik』『Tageblätter des Menschheitsleben』『Urbild der Menschheit』などである。
- (21) 前掲『全集』第一巻、117頁。
- (22) シュプランガー著『フレーベルの思想界より』（前掲書）23頁。
- (23) O. F.ボルノウ前掲邦訳書、21頁。
- (24) 同上書、21～22頁。
- (25) 同上書、22頁。
- (26) 同上書、23頁参照。
- (27) 同上書、25頁参照。
- (28) 同上書、25頁参照。
- (29) 莊司雅子著『フレーベル研究』（前掲書）24～25頁参照。
- (30) 同上書、40頁参照。
- (31) シュプランガー著『フレーベルの思想より』（前掲書）89頁参照。
- (32) O. F.ボルノウ前掲邦訳書、88頁。
- (33) 同上書、26頁。
- (34) 同上書、32-37頁参照。
- (35) この万有在神論は、クラウゼ (K. C. F. Krause, 1781-1832) の提唱した考え方である。しかし莊司博士は、「フレーベルは汎神論者であって、しかも単なる汎神論者ではない。彼は万有在神論者でもあるが、クラウゼの意味するような、単なる哲学的万有在神論者でもない。彼の神はあまりにもキリスト教的な香りが高い。といっても、もちろん単に既成のキリスト教の神でもない。」といって、フレーベルの神は、「キリスト教的万有在神論」であるといっている。（『フレーベル研究』72-73頁）
- (36) 前掲『全集』第二巻、16頁。
- (37) 同上書、16頁。
- (38) 同上書、17頁。
- (39) 同上書、17頁。
- (40) O. F.ボルノウ前掲邦訳書、67頁。
- (41) 前掲『全集』第二巻、18頁。
- (42) 同上書、18-19頁。
- (43) 同上書、129-130頁。
- (44) 同上書、26-27頁。
- (45) シュプランガーは、彼の著『文化と教育』（Kultur und Erziehung、村井実・長井和雄訳、106頁）の「ゲーテと人間のメタモルフォーゼ」の章で、アリストテレスの思想であるエンテレヒー（エンテレケイア）を「自己実現の法則」のことであるとしている。



- (46) シュプランガー、前掲邦訳書、『フレーベルの思想界より』120頁参照。
- (47) 前掲『全集』第二巻、27頁。
- (48) 同上書、27頁。
- (49) 同上書、27頁。
- (50) この「予想」という邦訳は、他に「予感」と訳されている場合があるが、フレーベルの用語の背景にある深い意味を考えると「予感」という訳語のほうが適当に思う。
- (51) 前掲『全集』第二巻、27頁。
- (52) O. F.ホルノウ前掲邦訳書、87頁参照。
- (53) 前掲『全集』第二巻、29頁。
- (54) 同上書、37頁。
- (55) 同上書、39頁。
- (56) 同上書、41-42頁。
- (57) 八杉竜一論述、「進化論と発達の科学」(岩波講座『子どもの発達と教育2』)、岩波書店、1979年、250頁。
- (58) 同上書、250頁。
- (59) 同上書、256頁参照。
- (60) G. S. Hall, Educational Problems, Vol. I, p.p.10-11。
- (61) Frederick Eby, The Development of Modern Education, 1959, P598。
- (62) 依田新・沢田慶輔編、『児童心理学』第二版、1978年、東京大学出版会、31頁。
- (63) Richard I. Evans, JEAN PIAGET, The Man and His Ideas, 邦訳、宇津木保訳、『ピアジェとの対話』、30頁。

なお、この論考における引用文献のほとんどが、邦訳書からの引用であり、原典にあたれなかったという意味で、本小論は未完である。